伊豆大島の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

熱活動、地震活動は低調に経過し、火山性微動も発生しておらず、ただちに噴火が発生する兆候は認められません。地下深部へのマグマ供給によると考えられる 1986 年の噴火以降の長期的な島全体の膨張は、2018 年頃からほぼ停滞しています。これまでに供給されたマグマは地下深部に蓄積されており、火山活動が活発化した場合は噴火に至る可能性がありますので、火山活動の推移に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１－①②、図２－①、図５～８）

北西外輪監視カメラによる観測では、剣ガ峰付近や三原山中央火孔などで弱い噴気が時々認められています。これらの噴気活動に特段の変化はありません。15 日に実施した現地調査では、三原山山頂周辺の噴気温度や三原山山頂火口内及びその周辺の噴気や地熱域の状況など熱活動に特段の変化は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図１－③、図２－②③、図４）

火山性地震は期間を通してやや少ない状態で経過しています。今期間、震源はカルデラ内の深さ０～２km 付近、北部、東部及び西方沖に分布しました。
火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図１－④、図２－④⑤、図３、図８、図９）

GNSS 連続観測などによると、地下深部へのマグマの供給によると考えられる 1986 年の噴火以降の長期的な島全体の膨張傾向は、2018 年頃からはほぼ停滞しています。約１～３年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2025 年 12 月頃からみられていた膨張の傾向が、８月頃から停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

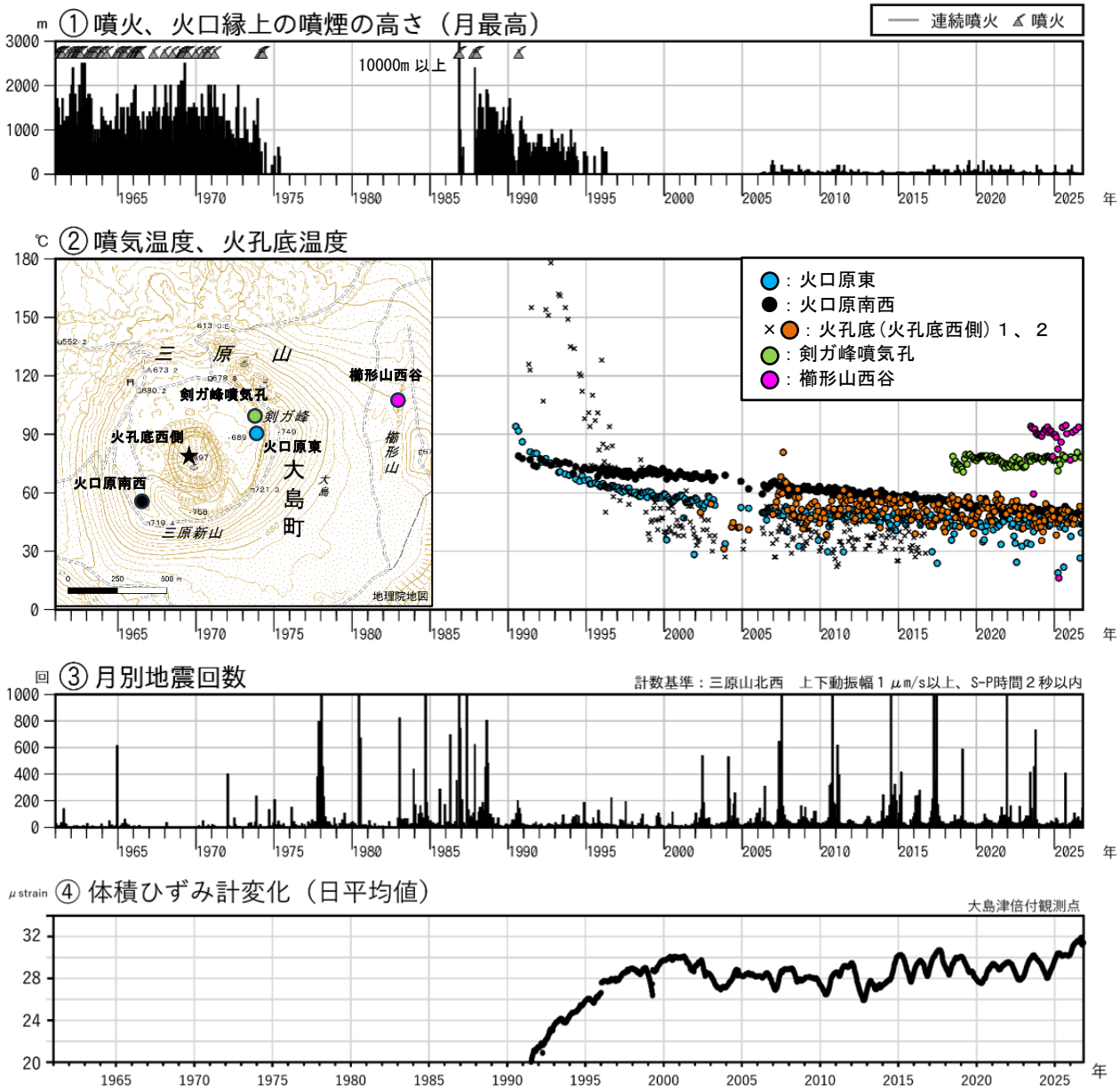


図１　伊豆大島　長期間の火山活動経過図（1961 年１月～2026 年 10 月）

① 1991 年 12 月 18 日までは火口縁上 130m以上、2002 年２月 28 日までは火口縁上 300m以上の噴煙の高さを観測していました。2002 年３月１日以降は北西外輪監視カメラでの常時観測における噴煙の高さの月最大値を示しています。
② 火口原東、火口原南西、剣ガ峰噴気孔、櫛形山西谷：デジタル温度計により直接測定した噴気温度。
火孔底（火孔底西側）１：赤外放射温度計により離れた場所から測定した火孔底温度。
火孔底（火孔底西側）２：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火孔底温度。
③ 1965 年５月 24 日までは津倍付観測点（旧大島測候所）で、1965 年５月 25 日から 2002 年２月 28 日までは津倍付観測点から約１km 離れた観測点で、2002 年３月１日以降は三原山北西観測点で計数された地震回数を示しています。地震回数には伊豆大島周辺海域で発生した地震も一部含まれています。
④ グラフの空白部分は欠測を示します。センサ温度変化によるみかけの変化及びトレンド除去を行っています。

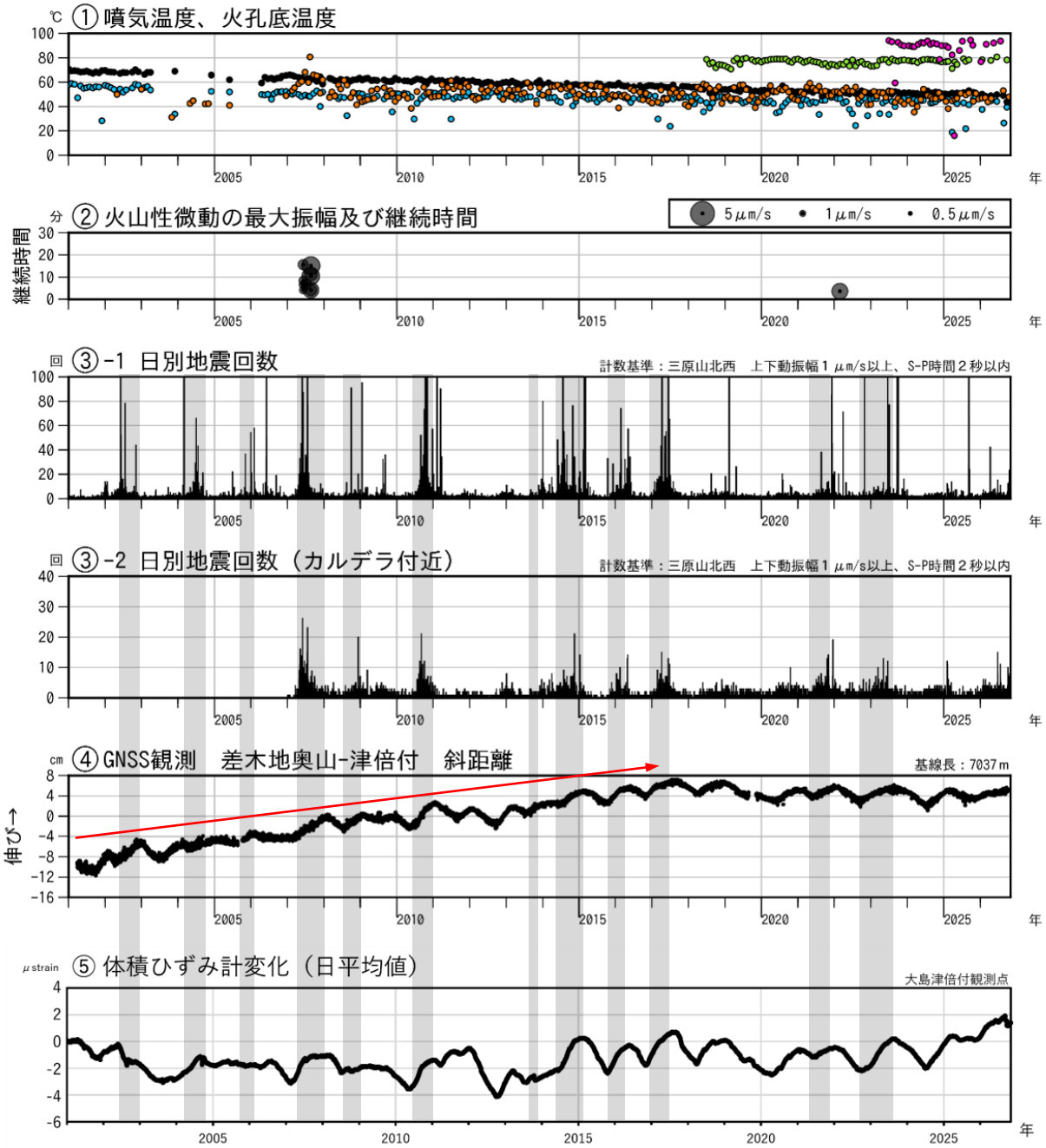


図２　伊豆大島　最近の火山活動経過図（2001 年１月～2026 年 10 月）

①　●火口原東、●火口原南西、●剣ガ峰噴気孔、●櫛形山西谷：デジタル温度計により直接測定した噴気温度。●火孔底（火孔底西側）２：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火孔底温度。
②　三原山北西観測点（上下成分）で計測された火山性微動の最大振幅と継続時間を示しています。2007 年６～８月にかけて発生した火山性微動については、北山麓で発生したと考えられます。
③　2007 年から領域別に区分をして計数しています。
④　図９の GNSS 基線②に対応。グラフの空白部分は欠測。2009 年 12 月 25 日に差木地奥山観測点の支柱工事を実施しています。2010 年 10 月及び 2016 年１月に解析方法を変更しています。

・長期的な島全体の膨張傾向（④の赤矢印）に加え、約１～３年周期で膨張と収縮を繰り返す短期的な地殻変動もみられ、膨張がみられる時期に、これと関連すると考えられる地震活動の活発化がみられることがあります（③④⑤の灰色部分）。
・体積ひずみ計変化には GNSS 観測に対応した周期的な変動がみられ、2025 年 12 月頃からみられていた膨張の傾向が、９月頃から停滞しています。（④⑤）。

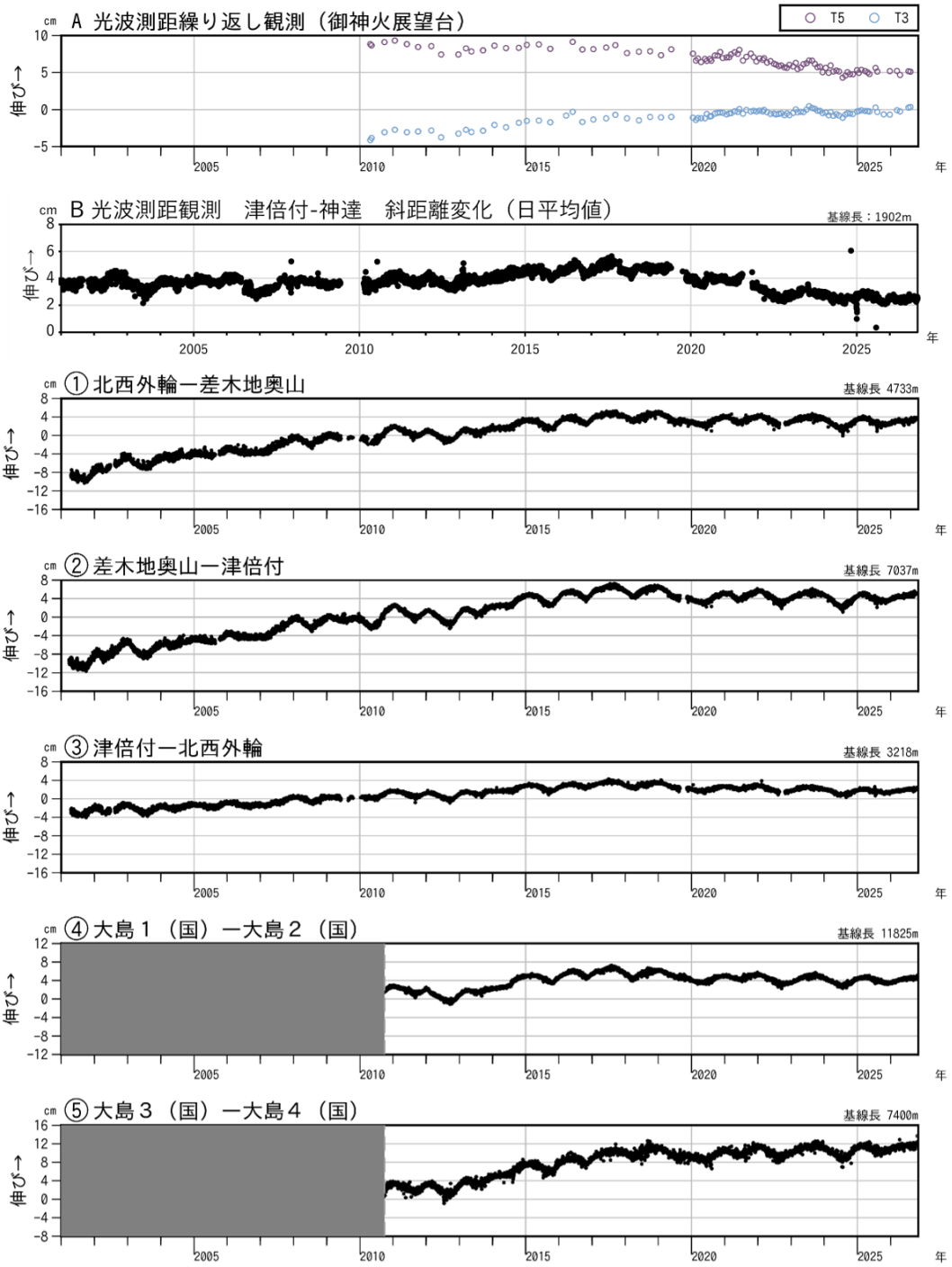


図３－１　伊豆大島　GNSS 連続観測及び光波測距観測による基線長変化(2001 年１月～2026 年 10 月)

（国）：国土地理院、①～⑤は図９の GNSS 基線①～⑤に対応、A は図８右の基線に対応、B は図９の光波測距基線 B に対応、グラフの空白部分は欠測。
2010 年 10 月及び 2016 年１月に解析方法を変更しています。(①～⑤)
2009 年 12 月 25 日に差木地奥山観測点の支柱工事を実施しています。
2010 年２月 17 日及び 2021 年 11 月 10 日に機器を更新しています。(B)

・地下深部へのマグマの供給によると考えられる長期的な島全体の膨張傾向は、2018 年頃からはほぼ停滞しています。

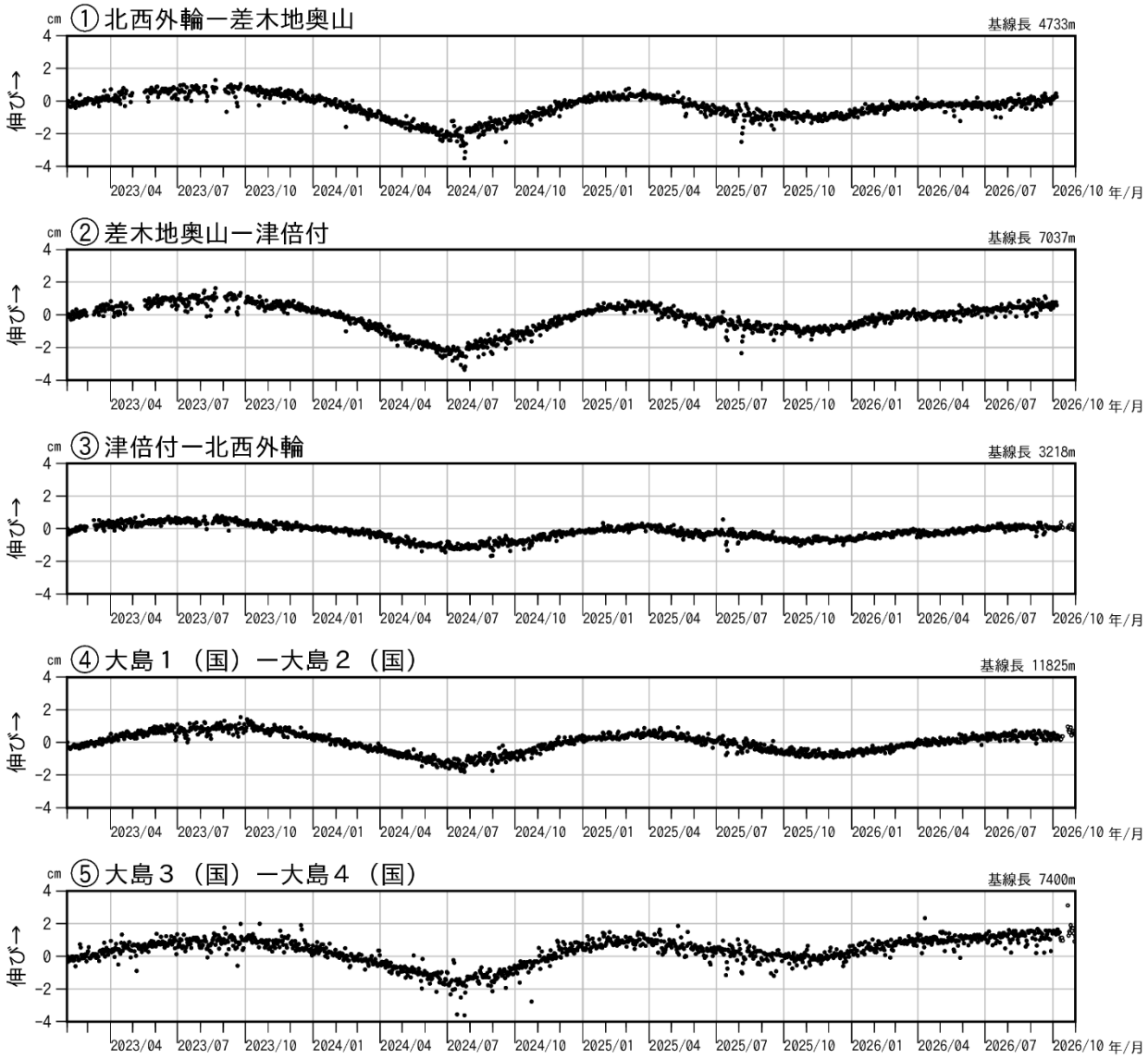


図３－２　伊豆大島　GNSS 連続観測による基線長変化(2023 年２月～2026 年 10 月)

（国）：国土地理院、①～⑤は図９の GNSS 基線①～⑤に対応、グラフの空白部分は欠測。

・約１～３年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2025 年 12 月頃からみられていた膨張の傾向が、８月頃から停滞しています。

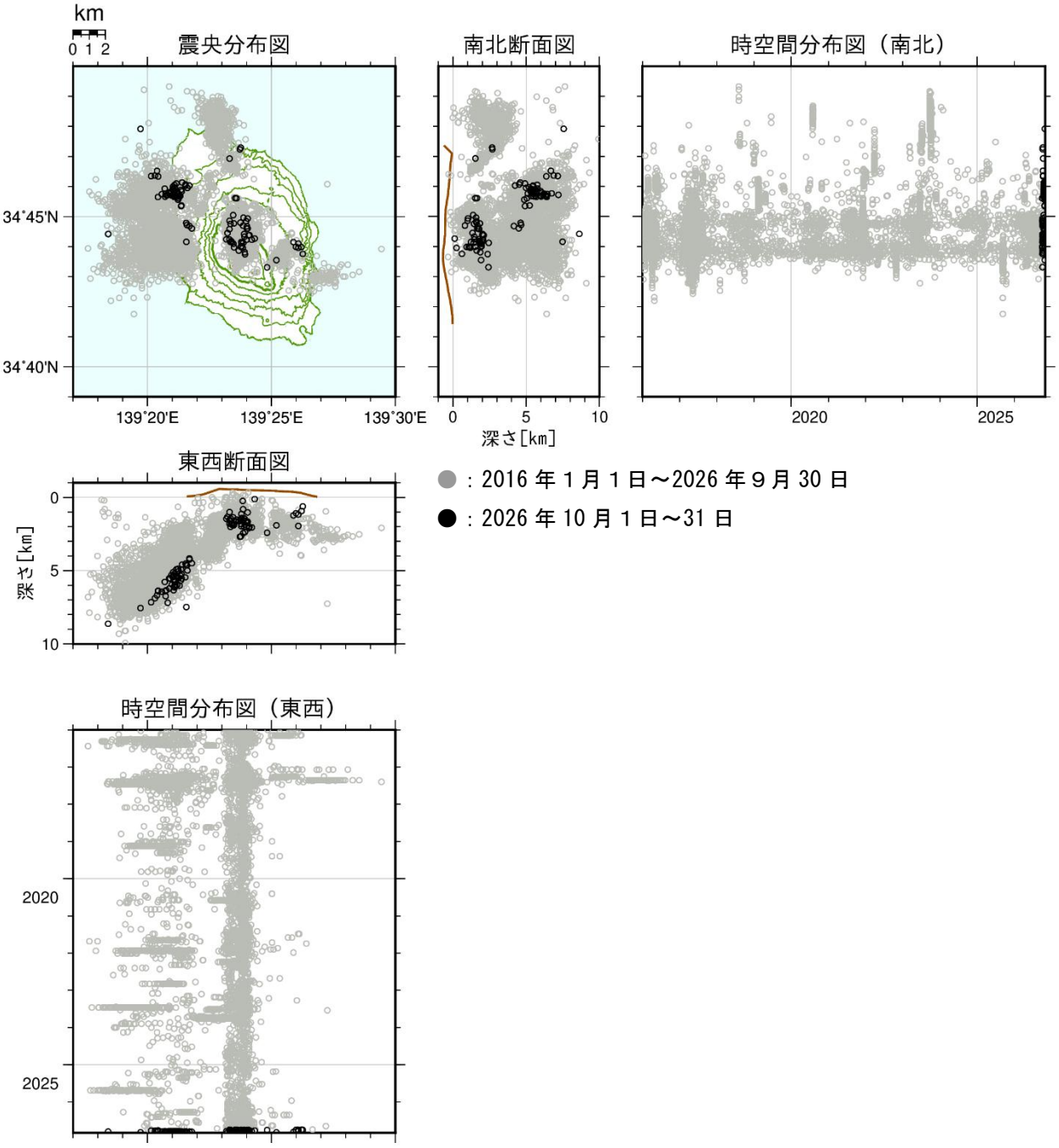


図４　伊豆大島　震源分布図（2016 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）

・長期的には、地震活動は活発な時期と静穏な時期を繰り返しています。
・今期間、震源はカルデラ内の深さ０～２km 付近、北部、東部及び西方沖に分布しました。地震活動は低調に経過しました。



山頂部（10 月 18 日、北西外輪監視カメラによる）

図５　伊豆大島　三原山山頂部の状況（撮影方向は図８参照）

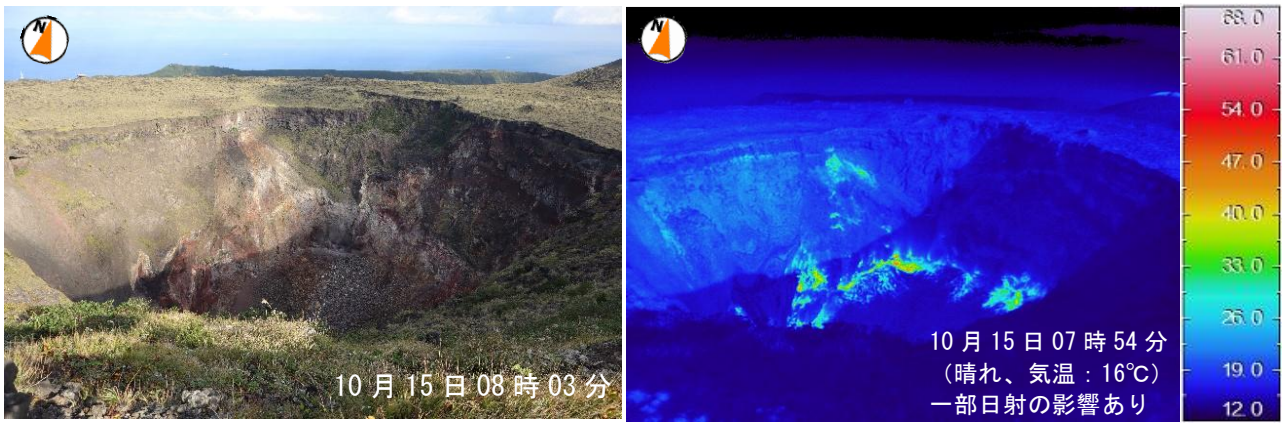


図６－１　伊豆大島　中央火孔内の状況（撮影方向は図７参照）

・中央火孔内では地熱・噴気活動が継続しています。

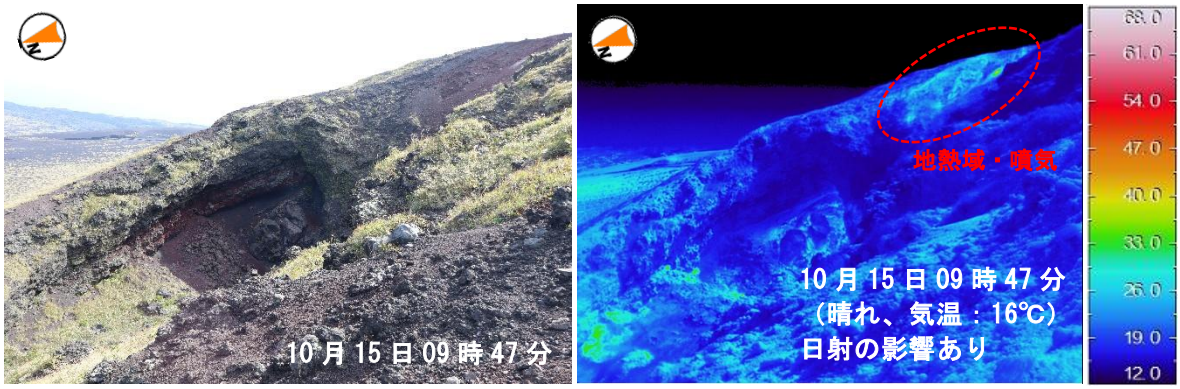


図６－２　伊豆大島　B3 火孔の状況（撮影方向は図７参照）

・B3 火孔周辺では地熱・噴気活動が継続しています。

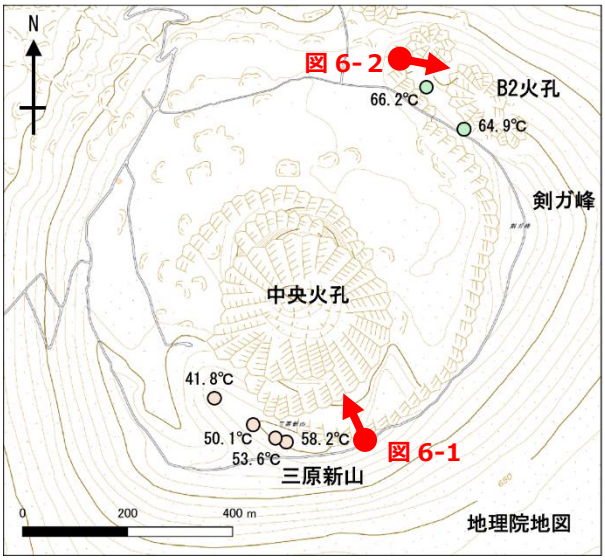


図７　伊豆大島　噴気温度の分布及び現地調査での撮影位置・撮影方向

（赤丸：撮影位置、→：撮影方向）

・噴気温度に特段の変化は認められません。

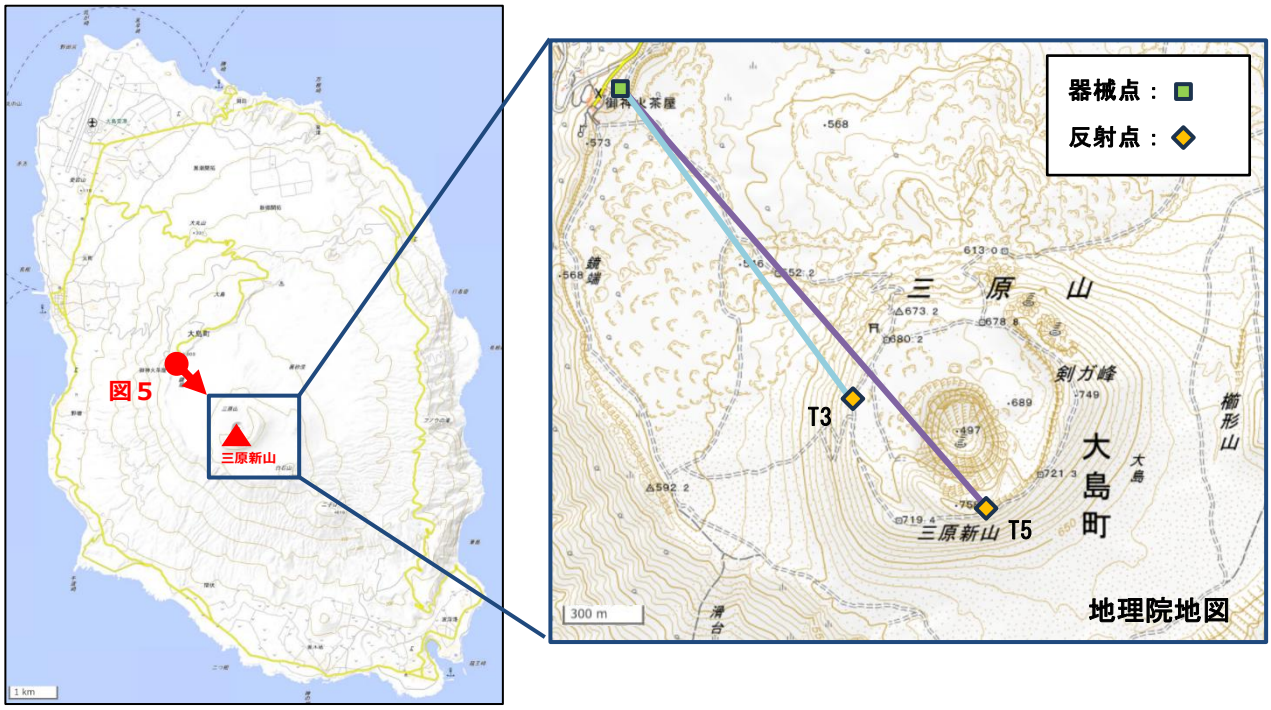
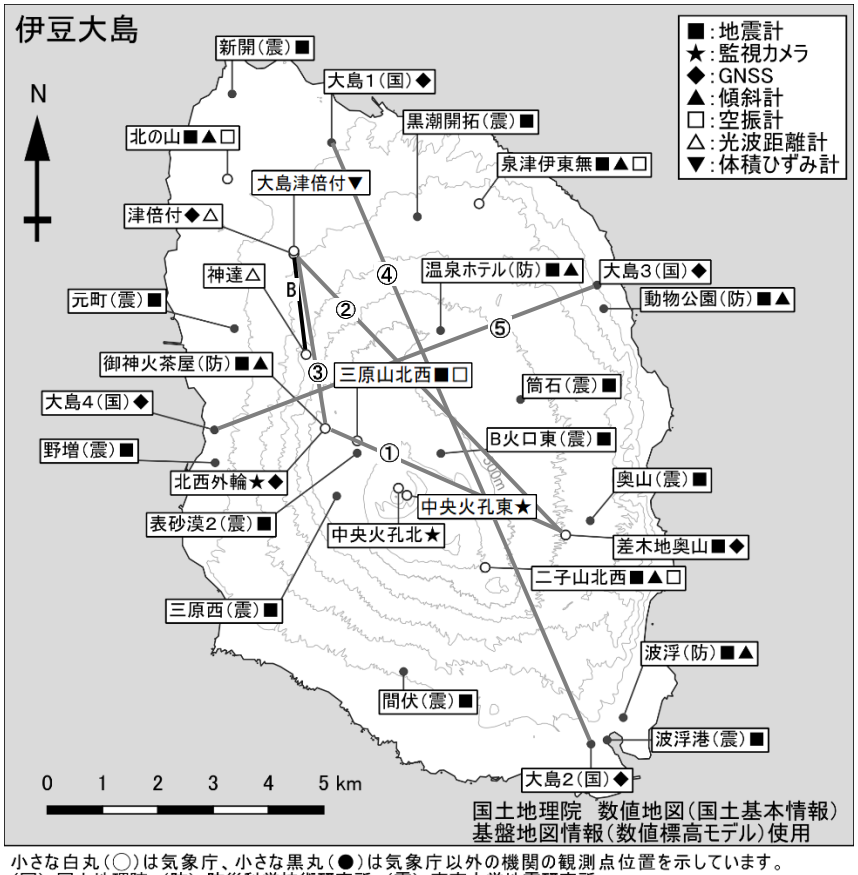


図８　伊豆大島　監視カメラの位置・撮影方向及び光波測距繰り返し観測の観測点
（赤丸：撮影位置、→：撮影方向）



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（震）：東京大学地震研究所

図９　伊豆大島　観測点配置図
図中の②は図２の GNSS 基線④に、①～⑤は図３の GNSS 基線①～⑤に、B は図３の光波測距基線 B に対応。